

「みたまのふゆ」とは、私共が常に蒙りいただいております大神様の恩徳、加護、御神威を尊称した言葉です。人間は自分ひとりの力で生きてゐるのではなく、つねに「みたまのふゆ」をいただいで、生かされてゐるのです。

安藤廣重と金澤八景

金澤八景の錦絵といへば、廣重の描いた大判八枚揃いが著名であるが、これは天保七年(一八三六)ころの作とされる。それまでに廣重が写生に金澤を訪れてはゐたのだらうが、廣重の金澤来訪がはつきりとしてゐるのは、嘉永四年(一八五一)と推定される江戸から三浦半島をめぐる箱根までの旅行で、「武相名所旅絵日記」が残されてゐる。

この絵日記には能見堂で一行が茶屋で休みながら八景を眺望する様子や、旅亭の東屋の二階の窓際から景色を楽しむ女性の姿をスケッチする場面、また金龍院の九覧亭、平瀧湾の船遊びなどが描かれてゐる。

上に載せた写真はこの年に刊行された「東海道名所書帖」(東魁堂版)に載せられた金澤八景で、この旅行のスケッチがもとになったものと思はれる。この画帳には朝比奈峠の切通しの絵図も掲載されてゐる。

「木曾路之山川」「阿波鳴門之風景」とともに雪月花三枚綴りの「武陽金澤八景夜景」は、安政四年(一八五七)の版行とされるが、やはりこの旅日記のスケッチを元にした構図が採用されてゐる。(上写真の明神とあるのが当社)

令和四年祭事曆

- 一月 一日 歳旦祭
- 鶏鳴神事
- 二月 二三日 天長祭
- 三月 二一日 春季大祭
- 祈年祭・合祀神例祭
- 四月 二九日 昭和祭
- 五月 十五日 例大祭
- 神社本廳献幣使参向
- 琵琶島弁天社へ神輿渡御
- 六月 三〇日 大祓式
- 大祓人形納め・茅の輪神事
- 七月 九日 天王祭出御祭
- 本社神輿御霊入・宮出渡御
- 七月 一日 三つ目神楽
- 無形文化財湯立て神楽
- 七月 一六日 天王祭巡幸祭
- 天王神輿町内巡幸
- 七月 二三日 手子神社例祭
- 九月 一日 浅間神社例祭
- 九月 一七日 熊野神社例祭
- 無形文化財湯立て神楽
- 一〇月 一五日 手子神社秋祭
- 無形文化財湯立て神楽
- 十一月 二三日 秋季大祭
- 新嘗祭
- 二月 八日 歳の市
- 開運熊手授与
- 二月 三一日 大祓式
- 大祓人形納め
- 毎月 一日 月次祭

徳川家康と金澤八景

江戸幕府の公式史書である『徳川実紀』の慶長五年の部分に以下のやうな記述があります。

此の道すがら、鎌倉の八幡宮にまうで給ひ、右大將家此のかた世々の古跡を尋ね給ひ、江嶋の辨天金澤の称名寺などとはせられ、七月二日江戸の城に入らせ給ふ。

陪従せし上方大名は、海道を直ちに江戸へ着陣すべしと命ぜられ、鎌倉御遊覧には御

本多政長の奉納と記録される東照宮家康公のご神像



家人のみ召具せられる。

慶長五年（一六〇〇）の九月

一五日が関ヶ原合戦ですので、

その直前の記事です。

大阪で五大老の一人であった

徳川家康は会津の上杉景勝を征

伐することになり、六月一六日

に大阪を出陣し江戸へ向かひま

した。

江戸へ入る直前に、軍勢一行

は直接江戸城へ向かはせ、身近

な御家人のみをお供にして、鎌

倉・江ノ島・金澤を

巡つてゐたのです。

鎌倉は、武家政権

発祥の地であり、そ

の最初の將軍である

源頼朝にあやかると

とは、家康の目指す

政治にとつて貴重な

ことであつたのでせ

う。

さらに詳細なこと

を種類の史料から探つ

てみると、

六月二九日

○江ノ島詣でる

○所々御遊覧ありて鶴岡八幡

宮に御参詣、御修造のこと

仰せ出され、ここに止宿。

七月一日

○鎌倉御遊覧ありて武蔵国金

澤に止宿。

○瀬戸の明神を拝し給ひて金

澤に止宿。

○海民の塩焼きを見給ひ、青

銅を賜る。

○向井兵庫助の国一丸に乗船

し金澤に到り給ふ

七月二日

○品川に御着あり

○秀忠公お迎へに出て、ご同

伴で江戸城へ

といった経過がおおむね確認で

きます。（史料により錯誤があつ

たりする部分もあります。また

この年の六月は小の月で二九日

までです。）

このあと、軍勢を整へて順次

出陣し、小山に着陣したところ

で石田三成一派の拳兵の報が入

り、方向転換して西へ向かつて

関ヶ原での両軍激突となります。

○

此より先、小田原北条氏滅亡

後、江戸城へ入つた家康は、新

朝比奈町鎮座

熊野神社

社伝によれば、鎌倉に幕府を開いた源頼朝が、その東北の守りとして熊野三社をここに勧請したものとひまます。仁治二年（一二四一）、鎌倉幕府は朝比奈切通しの開鑿に全力を挙げ、執権北條泰時は自ら現場に臨んで工事を指揮しました。社殿の建立もこの頃行はれたこととせう。

その後、元禄八年（一六九五）、地頭加藤太郎左衛門尉良勝が神殿を再建してから、里人の崇敬を集め、相模国鎌倉郡峠村の鎮守として崇敬されてきました。安永及び嘉永年間には再度の修築も行はれて、明治六年村社に列しました。

昭和五十三年、氏子一同の熱意を結集して、入母屋造、総檜、銅板葺きの本殿を完成し、さらに平成御大典記念事業として新たな拝殿を建築竣功して今日に至つてゐます。

御祭神は速玉男命、伊邪那岐命、伊邪那美命の三柱です。

例祭日は九月十七日で、昔ながらの古式にのつとつた湯立神楽が今も続けられてゐます。

たな支配地域の管理体制を進める過程で、瀬戸神社に百石の社領を寄進する朱印状を発してゐます。称名寺の寺院領も百石でした。すでにこの時点で、金澤の地域を重視してゐたと思はれます。

そして江戸城には金澤八景の風景を描いた襖絵がありました。現在、その下絵が東京国立博物館に残されてゐます。中奥御休憩所といふ將軍の日常生活の襖絵がそれです。

単に景色がよいからといふだけでなく、江戸といふ拠点の発展整備や防衛のためには、江戸湾(東京湾)の存在が大きく、その中の重要港湾としての六浦湊の存在が重視されたと思はれます。関ヶ原合戦を前にしての鎌倉から金澤訪問には、その再確認の意味もあつたのではないでせうか。

さらに、將軍職を秀忠に譲り、大御所となつて駿府(静岡)に居住するやうになつてからも、必要があつて江戸に出向く時には、鎌倉から金澤を経由し、船で品川へ向かふ事が多くあり、その際には権現山からの風景を

愛でられたと伝へられます。

○ 元和二年(一六一六)四月七日、家康公は駿府で薨去しますが、遺書もあり、久能山さらに日光に東照宮として祀られます。

これに併せて、金澤の地を代官として治めてゐた八木治郎左衛門は、金澤の権現山に東照宮を創建します。

このとき慶長五年に金澤に來られた時の御旅館の古材をもつて社殿を作つたとされます。

ここには寛永一五年(一六三八)、本多政長が家康公の御像を造り奉安されました。

また明和二年(一七六五)には松平忠恒が金幣の奉納をしてゐます。

享保七年(一七二二)に金澤に陣屋を構へた大名の米倉氏も度々、この東照宮の修造に当たられました。

このやうに

金澤の東照宮は、各地の大名も崇敬する処でもあり、神仏習合

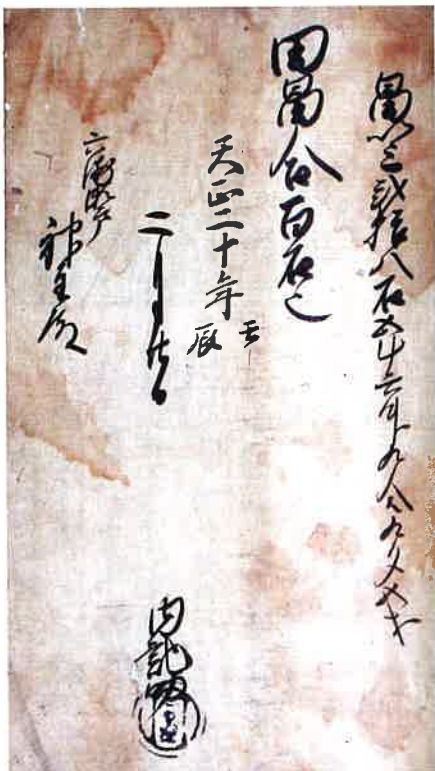
であつた江戸時代は、円通寺がこれを管理してをりました。この円通寺客殿が、現在は横浜市の文化財として金沢八景権現山公園に復元再建されてゐます。

○ 明治維新後、神仏分離となつて円通寺は廃寺となり、東照宮は瀬戸神社に合祀されました。

江戸城の中にも紅葉山東照宮が祀られましたが、釜利谷坂本村はこの紅葉山御領でした。その縁で坂本の禅林寺には東照宮

家康公の画像が伝承するなど、金沢区内には家康公ゆかりの史跡や文化財がいくつも残されてゐます。

社領百石の朱印状の田畑の明細を記した「坪付帳」の末尾



谷津町鎮座

浅間神社

谷津の町の鎮守として古来崇敬されてきました。伝説では御堂関白太政大臣藤原道長が当地に來遊し、能見堂から金沢の景勝を鑑賞したときに、正面の目の下にあるこんもりとした山を塗桶山と名付け、そこに浅間大神を勧請したといはれます。道長の來訪は史実ではありませんので、創建の詳細な時期は不明ですが、富士山信仰が関東一円に広まつた中で当地にも勧請されたものでせう。ご祭神は富士山の浅間神社と同じ木花之佐久夜毘賣命です。特に安産の御利益があり婦人の崇敬が篤かつたと伝へます。御祭神が天孫瓊杵尊の御后となり、御子神等を出産されたことによるものでせう。祭礼は六月一日の開山祭と九月一日の例祭。例祭(近くの土日曜)には谷津・東谷津・泥亀の各町内で神輿の巡幸その他のにぎやかな行事が営まれます。寛正四年(一四六三)西山松眠といふ医師が神饌田を奉納、以来、例祭には赤飯をお供へし、お下がりには崇敬者婦人が分けあつたといふことです。

瀬戸神社略縁起

大昔、今の泥亀町、大川町、釜利谷町小泉のあたりまで海が入りこみ、柳町や六浦町の塩場、南六浦、内川町内もすべて海でした。そして洲崎と瀬戸の間は、潮の干満時には急流が渦を巻き、容易に渡れぬ難所でした。古代人がここに海神を祀ったのが瀬戸神社の起源で、今から千五百年以上も前(古墳時代)のことです。

治承四年(一一八〇)鎌倉に入った源頼朝が、日頃崇敬する伊豆三島明神をこの靈域に遷祀してからは、六浦港の守り神「瀬戸三島大明神」として鎌倉幕府をはじめ上下の尊信をあつめ、その後、足利氏、小田原北条氏の崇敬も篤く、江戸時代には名勝金沢八景の中心にあつて、百石の社領を有する大社として、江戸の町民の間にまで信仰者がひろがりました。

明治六年郷社に列格、戦後は宗教法人となり神奈川県神社廳幣使参向神社に指定。現在の社殿は寛政十二年の建造で、昭和四年の屋根を銅葺きに改め、平成二十四年には御屋根替へと修増築の御修営事業が行われました。社務所(淑月館)は令和大禮記念事業として令和二年三月に竣功しました。

御祭神

大山祇(おほやまつみ)の命

伊豆国三島大社、伊予国大三島の大山祇神社の御祭神と同じ海上交通の神であると同時に、水源地を司る山の神であり、金属、岩石、木材などの建築資材や、森林、鳥獣に至るまで、一切の生活資源は、この大神の恩徳によるものです。

天孫瓊杵尊の御后となられた木花咲耶姫の御父神にあられます。

須佐之男(すさのを)の命

配祀の神の須佐之男命は、天照大神の御弟神で、八俣の大蛇を退治された神話は有名です。自然界、人間界の罪けがれや悪者を追い祓ひ、人々の苦しみを除いてお守りくださる神様で、別名を「天王さま」と仰がれてゐます。

七月の天王祭りには大神輿で氏子町内をくまなく御巡りになります。

菅原朝臣道真公

天満大自在天神とも尊称し、一般には「天神さま」と親しまれて呼ばれます。書道、学問、詩文、和歌に秀でてをられただけでなく、至誠、尽忠、孝道、正義、国家鎮護の神さまでもいらつしやいます。

家内安全の祈り

ご家庭の神棚には「神宮大麻」、「瀬戸神社」のお札、「荒神様」のお札をお祀りすることをオススメしてゐます。

「神宮大麻」は伊勢の神宮のお札です。「瀬戸神社」は地元鎮守、産土神で、私たちの身近な守り神です。日々の暮らしをいつも間近に見そなはして、篤くご加護してください。

伊勢の神宮は、皇祖天照皇大神が御祭神で、皇室、天皇陛下の祭祀を受けられる神宮です。天皇陛下の祭祀は、公平無私にして、常に国家国民の安寧を祈られるものです。「神宮大麻」を神棚に祀ることは、この陛下の大きな祈りを、私たち一人一人が一緒に祈らせていただくものとなるのです。

個人的なささやかな、しかし切実な祈りが、この大きな無私の祈りと合はさること、より大きなご加護となり、たしかなご受納につながるに違いありません。

「荒神様」は火除けと食物の神様です。単に防火だけでなく、食物を通じての健康管理にもご加護をいただきます。

家内安全のお札を一式いただいで神棚のお祀りをさせよう。

瀬戸神社

(〒三三六-〇〇二七)
横浜市金沢区瀬戸十八-十四

(電話)〇四五-七〇-一一九九九二
(FAX)〇四五-七〇-一一九九九四

<http://www.setojinja.or.jp>

手子神社

釜利谷町鎮座

釜利谷町総鎮守の手子神社は、もとこの地の領主伊丹左京亮が、文明五年(一四七三)瀬戸神社の御分霊を宮ヶ谷の地におまつりしたものです。

延宝七年(一六八〇)、伊丹氏の子孫、三河守昌家の子で、江戸浅草寺の智楽院忠蓮僧正が、現在地に遷祀して以来、釜利谷一郷の総鎮守として信仰をあつめて来ました。

明治六年村社に列格、大正十二年の大震災で倒壊しましたが、同十五年再建し、昭和四十五年には御屋根も総銅板葺きに改修し、一段と御神威を加へました。

御祭神は瀬戸神社と同じく大山祇命、例祭日は七月十七日(現在はその後の日曜日)ですが、十月十五日(前後の日曜日)の秋祭りには、古式豊かな湯立神樂が昔ながらの伝統を守つて行はれます。

境内の洞窟にお祀りする竹生島弁才天は、金沢八景のひとつ「小泉の夜雨」の中心地にあつたもので、厄除け、開運の福神として信仰されてゐます。